

# がん研有明病院 留学レポート

加納陽介

今回、若井教授のご尽力により三年間、がん研有明病院 胃外科に留学することができたので、その成果を報告させていただきます。

がん研有明病院は、その名の通り有明にあるのであるが、有明地域は東京オリンピックの競技会場建設の真っ只中ということもあって、目まぐるしく発展をしている場所である。私が在籍していた三年間の間にも、がん研の目の前の空き地には三棟のタワーマンションが建設され、国際展示場駅には新たにホテルが建ち、豊洲市場が開場し、お台場のガンダムはRX-78からユニコーンガンダムへ変わり…と例を挙げれば枚挙にいとまがない。がん研も、その発展に遅れることなく、日本一のハイボリュームセンターとして日々進化を遂げていっている。

私は、がん研に留学するにあたり自分の中で三つの目標を立てていった。一つ目は手術手技の向上、二つ目は学術的研鑽、三つ目はがん研で出会える人との親交を深めることであった。

まず、手術手技の向上について。がん研では、外科は術後補助療法も含めて化学療法にはまったくタッチしないため、手術のみに集中ができる環境であった。術者としては六十例程度、第一、第二助手もそれぞれ同程度の胃切除の手術に入ることができた。色々な面から多くの胃の手術に携わること、術者としても助手としても手術のピットフォールを知ることができ、胃切除の攻め手を多く身に着けることができた。また、スタッフの先生がレジデントとどのように手術をしているかを、何度も目の当たりにすることは、今後の自分が後輩の指導をするにあたって非常に大きな糧となったと感じている。

次に、学術的研鑽について。がん研は消化器外科全体で年間二千四百



件、胃外科で六百件程度の手術件数がある。そのため、普通の施設の数年から十年程度の症例数を一年でこなしており、短い期間であっても非常に説得力のあるデータを収集することができるのが魅力の一つである。そのおかげで論文に関しては計五本を作成し、現在二本 Gastric cancer にアクセプトされた。また、がん研での術前プレゼンは、海外から多くの見学者がくるため英語で行われている。年間を通して英語を使わなくてはいけない環境に身をおいたことは、英語への苦手意識を薄めたという点で非常に有意義であった。

次のがん研で出会える人との親交を深めることについて。がん研にはレジデントを含め六十人程度の消化器外科医が在籍しており、胃外科だけでもスタッフ六名、レジデント十名が所属している。これだけ多くの消化器外科医を有する病院は他にはなく、多くの外科医と知り合いになれたことは今後の人生にとって大きな財産であると感じている。その中でも胃外科レジデントとは、仕事では色々な苦勞を分かち合い、夜は酒をくみかわしアラフォーとして恥ずかしい思い出を共有することができた仲間である。できれば、誰かが今後の胃癌治療を引っ張っていく存在になってくれればと願ってやまない。当然、私も努力を続けたいと思っている。

最後になるが、今回の留学では、胃外科のスタッフの先生方に本当にお世話になった。特に同門である大橋先生には多大なサポートをいただいた。手術においても難関症例を含め多くの術者としてのチャンスをおいただいた。また、先ほど述べた五本の論文の Corresponding author はすべて大橋先生であり、手術だけでなく学術的にも多くのことを学ばせていただいた。この留学を通して、いつか自分も大橋先生のように次世代の外科医に大きなチャンスを与えられる外科医になりたいと思うようになった。そのために、がん研での経験を活かし、今後も日々努力していきたいと思う。

(平成二十一年入会)

